

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第278集

警弥郷B遺跡

—第2次調査の報告—

1992

福岡市教育委員会

け や ご う
警 弥 郷 B 遺 跡

—第2次調査の報告—



遺跡調査番号 9025
遺跡略号 KYB2

1992

福岡市教育委員会

序

福岡平野南部の南区一帯から春日市、那珂川町にかけては大型団地の造成、土地区画整理事業、新幹線博多総合車両基地の設置などとともに宅地化が急速に進展している地域です。近年の新幹線博多南駅の開業はさらに宅地化に拍車をかけているところです。那珂川中流域のこれらの地域には、先人達の遺した貴重な文化遺産が数多く分布しています。

このたび、民間の共同住宅建設にともなって、福岡市、春日市、那珂川町にまたがる警弥郷B遺跡の一部を発掘調査致しました。

調査の結果、弥生時代から中世にわたる遺構・遺物が発見されました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が、埋蔵文化財に対する認識と理解、さらには学術研究上役立つことができれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査に際し、土地所有者の方々をはじめ、多くの方々のご理解とご協力を賜わりましたことに対し、心より感謝の意を表する次第であります。

平成4年1月13日

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

例　　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が平成2（1990）年7月26日から同年9月29日まで発掘調査を実施した、共同住宅建設に伴う警弥郷B遺跡の第2次緊急発掘調査の報告書である。
2. 警弥郷B遺跡の呼称は1980年発行の「福岡市文化財分布地図（中部・南部）」において整理したものである。1972年3月から7月中旬にかけて実施した山陽新幹線関係埋蔵文化財調査においては弥永遺跡と呼称している。A地点からC地点まで3箇所調査を行ない、C地点の隣接地が今回の調査区にあたる。現在では、A地点は警弥郷A遺跡、B・C地点が警弥郷B遺跡に含まれる。したがって、B・C地点を第1次調査、今回の調査を第2次調査としておきたい。なお、弥永遺跡群は現在の弥永団地の一部に相当する。
3. 遺構の呼称は記号化し、土壤→SK、溝→SD、用途不明遺構→SXとしている。なお、遺構番号は第I調査面が100番台、第II調査面が200番台としている。
4. 本書に使用した遺構図、現場写真、遺物実測図は、下村 智と上方高弘が行なった。また、整図は下村の他、安野 良、副田則子、吉村知子が行なった。遺物写真は上方高弘の撮影による。
5. 本書に掲載した遺物実測図の縮尺は土器、陶磁器を1%、石器、土製品を1%に統一している。
6. 本書で用いる遺構図の方位は全て磁北である。また、遺構レベルは弥永小学校（H=18.5935m—国土地理院高ー）から移動した。
7. 警弥郷B遺跡第2次調査に係る遺物・記録類（図面、写真、スライドなど）は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理される予定である。
8. 本書の執筆・編集は下村が行なった。

遺跡調査番号	9025		遺跡略号	KYB2	
調査地地籍	南区弥永五丁目14-1、14-38		分布地図番号	041-A-4	
開発面積	1,031m ²	調査対象面積	501m ²	調査実施面積	444m ²
調査期間	1990年7月26日～9月29日		事前審査番号	1-2-291	

本文目次

序	
I はじめに	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の組織	1
II 遺跡の立地と環境	3
III 調査の記録	5
1 第I面調査	5
A 水田址	5
B 溝	6
C 土壌	7
D 用途不明遺構	8
2 第II面調査	8
A A・Bトレンチ	8
B A-1区	9
C A-2区	10
IV おわりに	18

挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
Fig. 2 調査区位置図 (1/1,000)	3
Fig. 3 調査区範囲図 (1/500)	4
Fig. 4 調査区北壁（上）・南壁（下）土層断面図 (1/100)	6
Fig. 5 第I面遺構全体図 (1/100)	折込
Fig. 6 第II面遺構全体図 (1/100)	折込
Fig. 7 土壌実測図 (1/40)	7
Fig. 8 出土遺物実測図(1) (1/2・1/3)	11
Fig. 9 出土遺物実測図(2) (1/2・1/3)	12
Fig. 10 出土遺物実測図(3) (1/2・1/3)	13
Fig. 11 出土遺物実測図(4) (1/3)	14

Fig.12	出土遺物実測図(5) (1/3)	15
Fig.13	出土遺物実測図(6) (1/3)	16
Fig.14	出土遺物実測図(7) (1/2)	17

図 版 目 次

- PL. 1 (1) 第Ⅰ面水田址出土状況（北から）
 (2) 第Ⅱ面水田址出土状況（西から）
- PL. 2 (1) 調査区北壁土層堆積状況（南から）
 (2) 調査区南壁土層堆積状況（北から）
 (3) S K103出土状況（南から）
 (4) S K105出土状況（西から）
 (5) 水田①、②出土状況（西から）
 (6) 水田③、④出土状況（北から）
- PL. 3 (1) 東西畦畔水口出土状況（北から）
 (2) 偶蹄目足跡出土状況（東から）
 (3) 条溝出土状況（西から）
 (4) 南北畦畔切斷状況（北から）
 (5) S X104出土状況（西から）
 (6) 第Ⅱ面A-1区溝状遺構出土状況（北から）
- PL. 4 出土遺物（番号は実測図と一致する）

I はじめに

1 調査に至る経過

1989（平成元）年12月6日付で、東進不動産株式会社代表取締役 山本博久氏から、南区弥永五丁目14-1、14-38番地内における開発事前審査が宅地指導課に提出された。教育委員会埋蔵文化財課では合議にもとづいて開発事前審査会に出席し、申請地は警跡B遺跡の範囲内であるので試掘が必要である旨を伝えた。申請地の西隣りは1972年3月から4月にかけて山陽新幹線関係の事前調査で弥永遺跡C地点として本調査を実施し、弥生時代から歴史時代にかけての遺物を検出していたからである。当然申請地も同じ時期の遺跡の広がりが想定できた。試掘調査は関係者側と協議のうえ、同年12月21日に実施した。試掘は申請地全面を確認するため東西方向と南北方向にT字状に設けた。その結果、申請地東側に偏って水田址が検出された。水田上面には粗砂が堆積し、畦畔、足跡などが良好に残されていた。反対に西側は基底層が高く、かつ砂層が薄くなり、水田面の遺存は確認できなかった。水田面の時期は試掘時点でははっきりしなかったが、隣接の弥永遺跡C地点の調査成果から弥生時代に属するのではないかと推察された。以上の結果から、遺跡の存在が明らかとなり、遺跡の取り扱いについて関係者と協議をかね、工事によってやむ無く破壊される遺構については、記録保存のための本調査を実施することになった。調査対象は東側の残りの良い部分を中心にして約500m²を設定し、東進不動産株式会社の受託調査として行なうことになった。本調査は1990年7月26日から着手した。

2 調査の組織

調査委託：東進不動産株式会社 代表取締役 山本博久

調査主体：福岡市教育委員会

調査総括：埋蔵文化財課長 柳田純孝 埋蔵文化財第2係長 柳沢一男

調査庶務：埋蔵文化財第1係長 飛高憲雄 第1係 松延好文

調査担当：吉留秀敏、佐藤一郎（試掘調査） 埋蔵文化財第2係 下村 智

調査補助：上方高弘

調査作業：大神嘉彦、高田 茂、仲田忠孝、永川カツエ、江崎光子、鶴見千鶴、安高久子、山村スミ子、山下智子、長浦英美子、松井良子、木多ナツ子、黒瀬千鶴、永松トミ子、山本后代、竹原りえ、吉村知子

整理作業：上方高弘、安野 良、二牟禮香代子、竹原りえ、吉村知子、副田則子



Fig.1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

- | | | | | |
|------------|---------------|-------------|--------------|------------|
| 1. 諏訪郷B遺跡 | 8. 第玖永田遺跡 | 15. 竹ヶ木遺跡 | 22. 辻田遺跡 | 29. 貝塚寺古墳 |
| 2. 諏訪郷A遺跡 | 9. 亂成岡本遺跡 | 16. 西方遺跡 | 23. 門田遺跡 | 30. 井水遺跡群 |
| 3. 弥永原遺跡 | 10. 岡本四丁目遺跡 | 17. 大南遺跡 | 24. 天神山古墳 | 31. 駿音寺古墳 |
| 4. 日佐原遺跡 | 11. 岡本バンジャク遺跡 | 18. 大谷遺跡 | 25. ウトロ古墳 | 32. 老司古墳 |
| 5. 丹佐瀬持群 | 12. 岡本辻遺跡 | 19. -ノ谷遺跡 | 26. 駿音山中原1号墳 | 33. 老松神社古墳 |
| 6. 野多日B遺跡群 | 13. 赤井手遺跡 | 20. 下白水大塚古墳 | 27. 松木道持群 | 34. 老司瓦窯址 |
| 7. 須玖唐榮遺跡 | 14. 竹ヶ本古墳 | 21. 日押塚古墳 | 28. 宗石遺跡群 | |

II 遺跡の立地と環境

警弥郷B遺跡は、背振山に源を発する那珂川の中流域右岸、標高18mの沖積地に位置する。今回調査した部分は、南区弥永五丁目14-1、14-38番地内に当る。この部分は、『福岡県地名辞典』によればもと福岡市警弥郷に相当し、警弥郷という地名は「明治20年那珂郡上警固村・

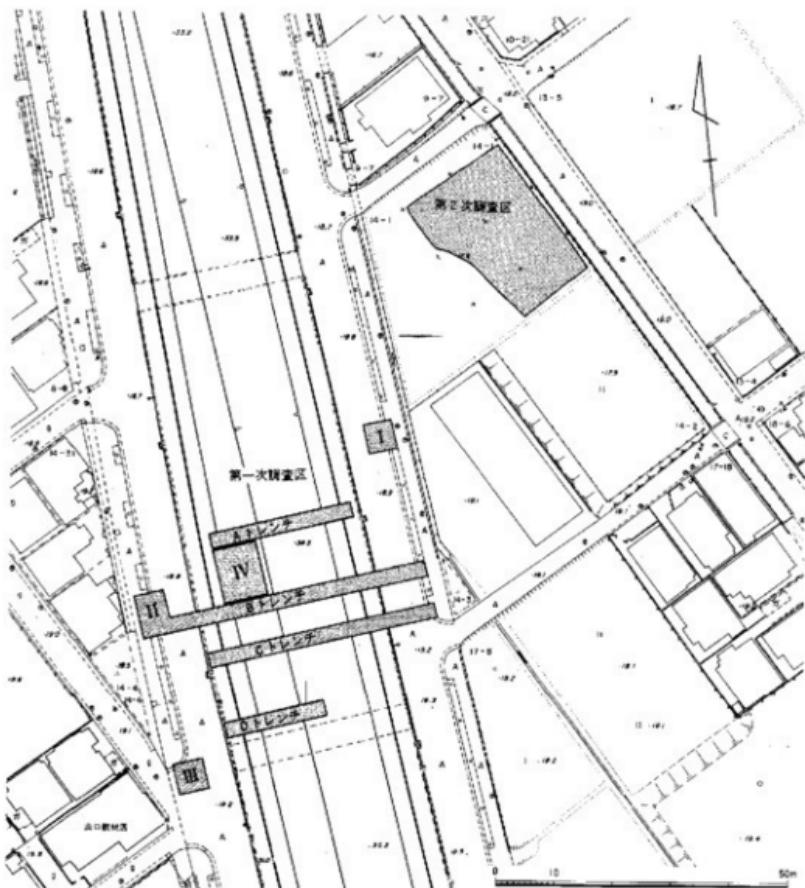
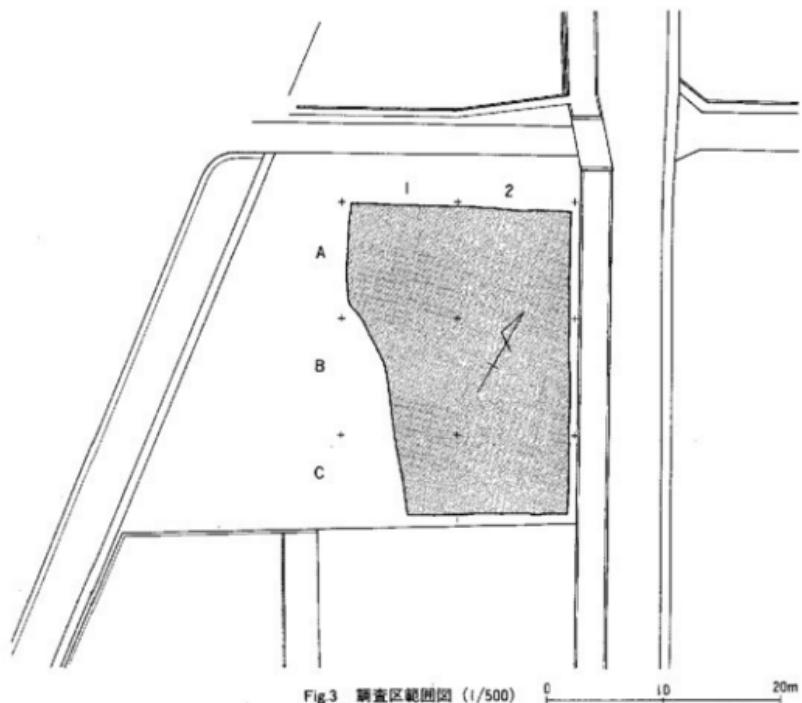


Fig.2 調査区位置図 (1/1,000)



弥永村・東郷村の3か村が合併した際、各村から1字づつとって新村名としたことに由来する。」とある。集落は段丘上に形成され、周辺部には沖積地が広がっている。

福岡平野には、背振山系から派生した丘陵が幾条にも平野部に向って延びており、さらに開析を受けて山麓周辺は小谷の入り込んだ複雑な地形を形成している。これらの地形は、博多湾へ注ぐ御笠川、那珂川の中流域に広がっており、弥生時代から古墳時代にかけての主要な遺跡が密集する。

警弥郷B遺跡は、A遺跡とともに那珂川右岸に展開し、沖積部に広がった遺跡である。遺跡範囲は行政区画が異なる春日市と那珂川町にまたがっているため確定できていない。東方には丘陵部が広がっており、1959年1月ガラス製勾玉の鉢型が発見された弥永原遺跡がある。弥永原遺跡は、1965年3月県教育委員会の調査、1966年12月から翌年1月にかけては市教育委員会の調査があり、環濠集落の一部と小形彷製内行花文鏡が発見されている。さらに東隣りの日佐原遺跡では、長宜子孫内行花文鏡が石蓋土壙墓から発見されている。

III 調査の記録

概要

調査地点は、那珂川から東方に600mはいった沖積地である。試掘によって水田址が確認されていたので、調査は先ずこの水田址の確認から始めることにした。重機によって水田面を覆う砂層の中位までを除去し、その後、人力による砂層の除去と水田面の検出を行なった。畦畔や足跡が割と残っており、溝や土壤なども検出することができた。これらの遺構を第Ⅰ面としておきたい。その後、第Ⅰ面水田下の様子を確認するため、東西（Aトレンチ）及び南北（Bトレンチ）に2本のトレンチを入れた。これによって細い溝や土壤状の落ち込み、東側ではさらに深い所で水田址を確認することができた。これらの遺構は検出レベルによって2面分あったが全体的な広がりを確認することができなかったので第Ⅱ面として一括して図化している。第Ⅱ面は北半部が中心となるが、東側では最下部に不安定ながら弥生前期後半の水田面が検出され、遺物がまとまって出土している。

1 第Ⅰ面調査

A 水田址 (Fig. 5, PL. 1~3)

調査区全面にわたって足跡が検出された。水田土壤は黒色粘質土から暗灰茶褐色粘質土で、足跡には灰色から褐色の粗砂が詰まっていた。足跡の残りは良く、右足か左足かの判別ができるものがかなり存在した。ただ列をなす足跡の並びは明確には確認できなかった。足跡の中には人間以外のものがあり、爪がふたつに割れているところからウシの足跡ではないかと推定された。

畦畔は略東西及び略南北方向にそれぞれ確認できた。略東西方向はN58°Eで、幅は上端で50~60cm、下端で80cm前後ある。高さは10cm程度残存していた。東側に水口が認められる。略南北方向の畦畔は、調査区東側で検出され略東西方向の畦畔と「T」字形に交わる。幅広で上端1m前後、下端1.2m前後あり、高さは10cm程度である。方向はN28°Eである。この畦畔は南へ行くに従い方向を西側に変更し、やがて消滅する。この消滅した部分が水口ではないかと考えられる。

調査区南側に位置する水田面は、畦畔がはっきりしなくて水田面が北側より10cm程度高い。中央部には池状の窪みS X104が存在する。SK105は水田面に掘り込まれた小形の土壤である。水田面には足跡が非常に多く見受けられた。以上、調査区全面に水田面が検出された。便宜的に中央部の水田面を水田①、略東西方向の畦畔から北側の水田面を水田②、略南北方向の畦畔が西側へ曲がる部分より南側の水田面を水田③、南側の1段高い水田面を水田④としておきた

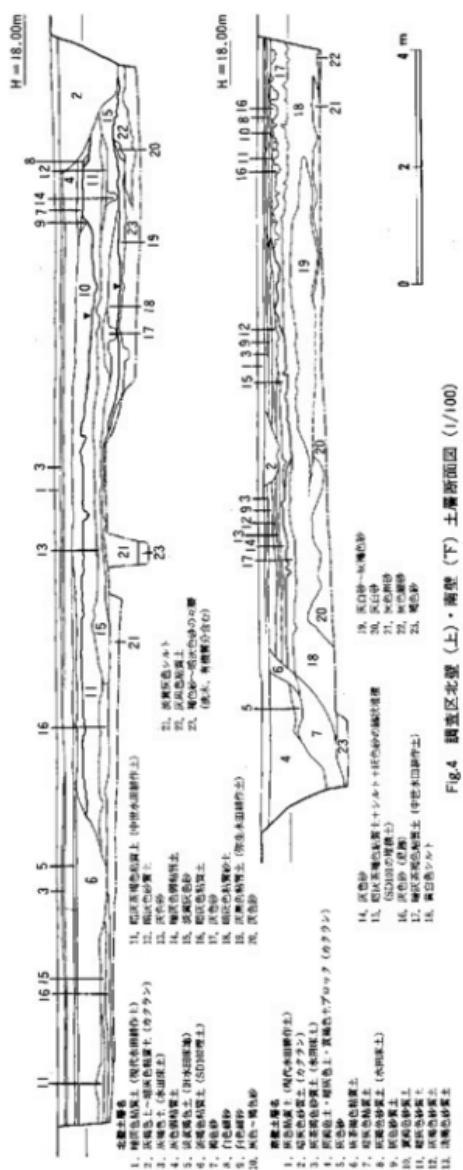


Fig.4 調査区北壁(上)・南壁(下) 土壌断面図(1/100)

い。しかし、調査面積が狭かったので1枚の完結した水田面は確認することができなかった。したがって、水田面の単位面積を算出できなかつたが、水田①でみた場合180m²以上の広い区画であったと推察される。なお、略東西方向の畦畔東側、水田①の東側及び水田④の東側には細かい条溝が認められた。田ゾリの痕跡ではないかと考えられる。

水田面からの出土遺物は極めて少なかった。Fig.8-10~14は水田面を覆う砂層から出土したもので、10は玉縁の口縁部を持つ白磁碗である。水田④出土。11~13は水田①と②から出土した土師器の壊である。ともに磨滅が激しく体部の棱線が擦れて平滑になっている。底部は11・13がヘラ切り、12が糸切りではないかとみられる。14は奈良時代の須恵器壊の高台部である。焼成が悪く淡い黄褐色を呈している。水田②出土。

B 溝

S D101 (Fig.5、PL.1)

調査区東側で検出された略南北方向の溝である。北側は畦畔と並行して走行し、幅1.5m、深さ0.2mを測る。方向はN28°Wである。南側はやや方向を東側にとりN21°Wになる。幅は4m前後に広がり、深さは0.15m程度と浅くなる。溝は全体的に不安定であり、溝底には足跡が残る。水田に水を供給した水路であろう。



Fig.5 第I面遺跡全体図 (1/100)

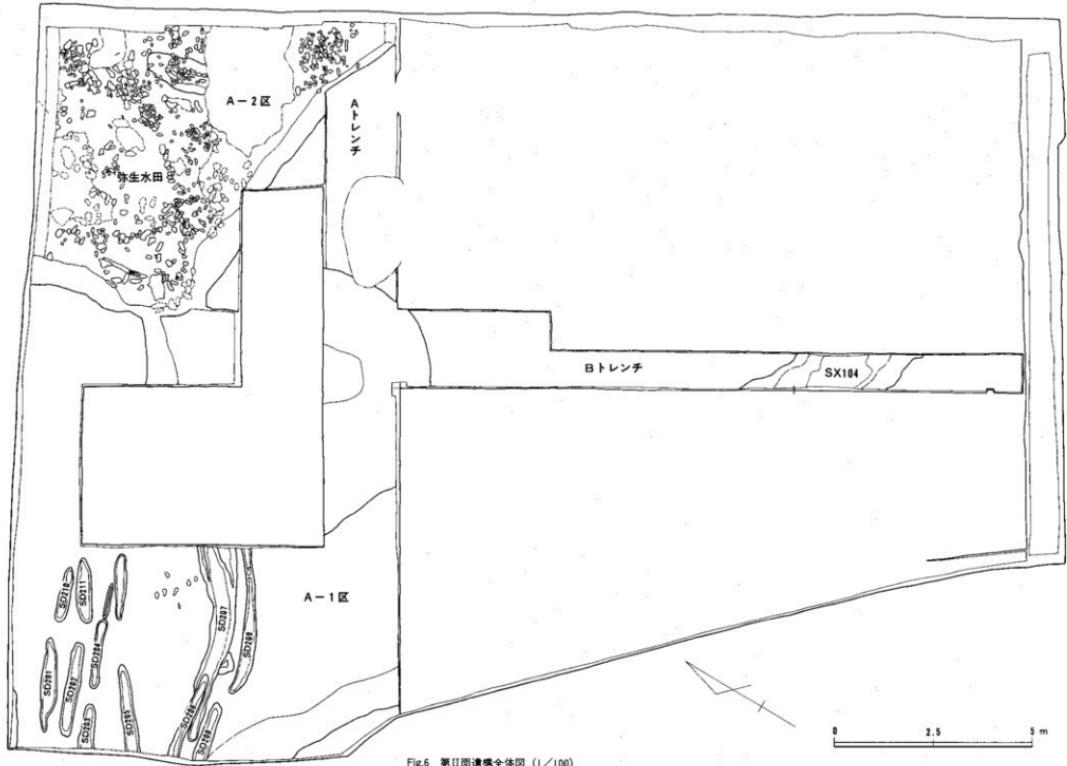


Fig.6 第四面遺構全体図 (1/100)

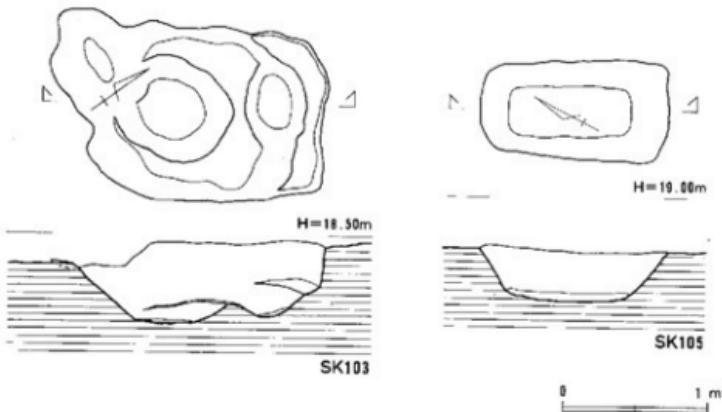


Fig.7 土壙実測図 (1/40)

水田址と同じ灰色から褐色の粗砂で埋まっていた。出土遺物はあまり多くはない。Fig.8-1は弥生前期末の甕である。口縁部はやや外方に開き下端に刻目を施す。胸部上位にも刻目尖底を貼り付ける。外面はハケ目調整が施される。2は、鎧蓮弁文の青磁碗底部である。厚手の底部で灰緑色の釉が厚くかかる。底面は露胎である。15世紀初めの時期であろう。3は腰岳産の黒曜石を使用した小形の石鏃である。先端部が折損し全体に磨滅している。4も腰岳産の黒曜石を素材にした綫長剣片である。下部を折断しており、側縁に使用痕かその後にできたものかはっきりしないが細かな剣離が観察される。S D101の時期は、出土遺物が殆ど流れ込みであり時期を決定し難いが、水田址との関係で中世末と考えておきたい。

S D 102 (Fig. 5) 調査区北壁近くで検出した落ち込みで、大部分が調査区外へ延びているので全体の様子が分らない。一応溝状の落ち込みと考えておきたい。5.5m分だけ確認できた。出土遺物はFig. 8-5である。土師器の甕で底部を欠失する。復元口径17.2cmで、内外面とも淡褐色を呈している。胎土は精良である。この土師器は混入品であろう。この遺構は水田面との切り合いから中世以降に属すると考えられる。

C 土 壙

S K 103 (Fig. 7, PL. 2・4) S D101の溝底で検出された土壤状の窪みである。人為的なものではなく、水路の水流で抉られてできたものとみられたが、ここでは一応土壤として取り扱っておきたい。不定形を呈し、長さ1.9m、幅1.2m、深さ0.55mを測る。壙底は段状の窪みになっている。出土遺物は壙底にまとめて出土した。下層の弥生土器が水流に洗われて堆積

したものであろう。酸化鉄分が厚く付着していた。Fig. 8 - 6 は壺の口頸部である。口径20.8 cm、残高9.3cmで灰茶褐色を呈し、胎土に2~3mmの大粒の石英・長石砂を混入する。口縁部は外側にやや肥厚し、端部は僅かに窪む。7は壺の頸部から胴部にかけての破片である。頸部と胴部の境に細い沈線を入れる。茶褐色を呈し、外面はヘラ磨きか。8は壺の口縁部である。口唇部下端に刻目を入れ、口縁内側及び外面はハケ目調整が施される。9は、やや窪み底状の厚みのある底部である。やや大粒の石英・長石砂を含み暗茶褐色を呈する。これらの遺物は弥生前期末に属すると考えられる。

S K 105 (Fig. 7、PL. 2) 水田④で検出された長方形の土壙である。長さ1.3m、幅0.7m、深さ0.35mを測る。時期を決定する明確な出土遺物はないが、水田面に切り込まれていることから中世以降の時期が想定される。

D 用途不明遺構

S X 104 (Fig. 5・6、PL. 3) 水田④で確認した長楕円形の座地である。長さ6.0m、幅3.0m、深さ0.3mで皿状に窪んでいた。水溜め遺構かと考えたがはっきりしない。この遺構は第II面調査時Bトレンチで下部の様子を観察したところ、幅2.5m、深さ0.65mの土壙状の落ち込みであることが分った。長さは全体を掘り下げなかったので明確でないが5m前後はあるとみられる。埋土は水田土壤と同じものが厚く堆積していた。出土遺物は殆どなく、時期を決定し難いが、第I面水田面と同じ時期か、あるいはそれよりも古くなるものと考えられる。

2 第II面調査

A A・Bトレンチ

Aトレンチ (Fig. 6) 第I面の下部を確認するため東西方向に幅2mのトレンチを入れた。暗灰茶褐色粘質の水田土壤を除去すると黄灰色細砂層が現われ、弥生時代から古墳時代の遺物を含んでいた。トレンチ西端部は地形の高まりが見られ、西側の旧地形が高くなるという試掘結果と合致した。トレンチ中央部では湧水のみられる窪地があり、黄灰色細砂層の下に灰色粘質土、暗灰色粘質土がみられた。これらの層には弥生土器を含んでいた。東側は土層がやや複雑になっており、中世の水田土壤下に淡黄灰色細砂、黄白砂、灰白砂、黄灰色細砂が堆積していた。上部の2層を(上)、下部の2層を(下)とし、北壁土層の15、18に対応して考えている。下層は弥生水田を覆う層である。東側は弥生水田が広がっていることもあり遺物がまとまって出土している。

Fig. 9-23・24は中央部湧水点から出土した壺底部である。23は上部の灰色粘質土出土と下部の暗灰色粘質土出土の破片が接合したもので、底径10cm、淡灰褐色を呈し大粒の石英・長石砂を多く含む。粗いヘラ研磨で調整されている。24は下部の暗灰色粘質土から出土したもので前者と良く類似している。外面にハケ目状の調整痕がみられる。25は東側の下層から出土した須

恵器坏身である。口径11.2cm。26は腰岳産の黒曜石を用いた石鎌である。全長2.2cm、剥片を素材とした薄い鎌で裏面に主要剥離面の一部が残る。弥生前期のものであろう。東側出土。27・28は土製紡錘車である。27は径3.6cm、重さ22gで、東側上層出土。28はやや破損しているが径3.5cmを測る。中世水田土壤下部から出土している。

Bトレンチ (Fig. 6) Aトレンチと直交して南北に入れたトレンチである。北側は幅2m、南側は中央部まで幅2m、それ以南は幅1mで掘り下げを行なった。南側はS X104の下部の確認を目的としたもので、遺物の出土が極端に少なかったので拡張は行なわなかった。北側からはまとまって遺物が出土している。

Fig. 9-29~31は上層から出土した壺形土器である。29は口径22.8cm、胎土に3mm前後の砂粒を含み、外面は茶褐色、内面は灰褐色を呈する。外面及び口縁部内側はハケ目調整がみられる。30は「く」の字状に口縁が屈折し、口唇下端に刻目を持つ。口縁下にも刻目突帯を貼付する。口径20cmで、2mm大の石英・長石砂を含み、外面は暗茶褐色を呈する。口径の割には器壁が厚い。31も30と良く類似している。外面に粗いハケ目痕が残る。32・33は前者と同様北側下層から出土した壺底部である。32は底径7.4cm、33は底径6.4cmを測る。ともに器壁が厚く外面にハケ目痕が残る。34は北側上層から出土した土製紡錘車である。径3.9cm、重さ28gで淡褐色を呈する。全体をナデ調整によって仕上げている。

B A-1区 (Fig. 6, PL. 3)

Aトレンチ及びBトレンチの調査結果によって中世の水田面下にも遺構・遺物の存在が明らかになったので、遺構の広がりを面的に確認するため第I面の水田面を除去し、下面(第II面)の遺構検出を行なった。A-1区の土層は中世水田耕作土(暗灰茶褐色粘質土)の下が肩厚10cmの黄灰色細砂層、その下が13cmの暗黃灰色細砂層、さらにその下は層厚20~30cmの淡黃灰色細砂層になっている。遺物は上部の層に多かった。また、略東西方向の細い溝を数条確認した。溝はS D201から211まで番号を付したが、人工的なものか自然的なものか判断できなかった。足跡状の落ち込みも数個確認したが水田土壤がなく水田址とは認められなかった。

Fig. 8-15・16はSD201から出土した弥生前期末の壺形土器の肩部である。同一個体と思われ、沈線で重弧文を描く。17は基筒底の明青花皿である。SD205から出土したもので、底径3.8cm、見込みに花文、外面に圓線と文様を具須で描く。16世紀前半代のものであろう。この明青花が第II面の上層遺構から出土したこと、少なくとも上面の水田址は16世紀前半代を遡らないと考えられる。18は中世水田の耕作土から出土した黒曜石製の削器である。石質から腰岳産の黒曜石と考えられる。両側縁には細かな調整剥離が認められる。Fig. 9-19は中世水田耕作土から出土した古墳時代後期の坏身である。20は上層出土の白磁皿である。底径4.6cmで灰白色の良質な胎土を持ち、釉調はやや黄色味を帯びた灰白色を呈している。見込みに片切彫で花文を描く。21は下層出土の砥石である。荒砥で灰白色を呈し褐色の斑がはいる。現存長6.0cm、幅4.1

cmを測る。砂岩製である。22は土製紡錘車である。径3.8cm、重さ20gでやや石英・長石砂を混入し、淡灰褐色を呈している。

C A-2区 (Fig. 6, PL. 1)

調査区北東部を中心とする部分で、各トレンチからの出土遺物が多かったので全面的に掘り下げを行なった。面的には2面分あったが上面の遺構ははっきりしなかったので、下面の弥生水田面を中心に調査を行なった。弥生水田面は1段低くなり、東側に広がっていることが明らかになった。ただ、水田土壤は薄く、水田としても不安定な状態であったことが推察される。

Fig.10は中世水田土壤及びその下の淡灰褐色砂層から出土した遺物である。35は外反する甕口縁部である。口唇部に刻目を持ち、内外面ともハケ目調整がみられる。36・37は甕口縁部で内側を肥厚させ、強く外反する。口唇中央部はやや窪み上下端に刻目を施す。刻目は口縁内側にも認められる。金海タイプの甕である。38は底径17cmの大形の甕底部である。底面はやや窪み粗いヘラ磨きが施される。金海タイプの底部であろう。以上が中世水田土壤出土である。下位のものが混入したものであろう。39は淡灰褐色砂(II面上層)から出土した金海タイプ甕底部である。内外面ともヘラ磨きが施される。40~43は壺形及び甕形の土器底部である。43は中期初頭の上げ底タイプである。44は甕胴部片で2条の刻目突帯が貼付される。45~48は甕底部である。49は土製紡錘車で、径3.9cm、厚さ1.6cm、重さ29gを測る。灰褐色を呈し、1mm前後の石英・長石砂を含む。以上がII面上層から出土したものである。

Fig.11 50~54は甕の破片である。50は頸部と肩部の境に沈線1条、51は沈線2条と貝腹縁による綾杉文を施す。II面上層出土。52・53は下層出土で、肩部に綾杉文を施す。54は強く外反する口縁部で、外面に粗いハケ目を施す。55は口縁内側を肥厚させ、外面に刻目を施す大形の甕口縁部である。下層の弥生水田を覆う砂層から出土。56~60は下層の灰白砂を中心に出したるものである。56・57は甕形土器で、57は弥生水田を覆う砂層から出土。外面はハケ目、内面は口縁内側がハケ目、胴内面にはナブ調整を施す。58~62は甕及び甕の底部である。61・62は上層から出土。

Fig.12 63~69、71~76は下層及び弥生水田から出土した甕形土器である。外反する口縁に刻目を持ち、外面はハケ目調整、内面はナブ調整が施される。64は口縁部の外反度が強く、刻目は口唇上下端に認められる。65は口唇部に刻目を施さない。66は部分的に口縁部を折り曲げた状態で、下端に刻目を施す。67は胴部上位に細い沈線を1条入れる。68は胴部に突帯を1条貼付するが器壁が磨滅しており、刻目の有無は確認できない。69は底部で、内外面ともヘラ磨きが施される。70は弥生水田耕作土から出土した縄文晚期終末の浅鉢形土器である。灰黒色を呈し、ヘラ研磨が観察される。71は胴部に刻目突帯を持つ甕口縁である。弥生水田土壤から出土。72~76は底部である。72はミニチュアの底部である。75は底部穿孔である。外面から敲打によって開けられている。底径5.6~6.1cmのやや横円形で、灰茶褐色を呈している。

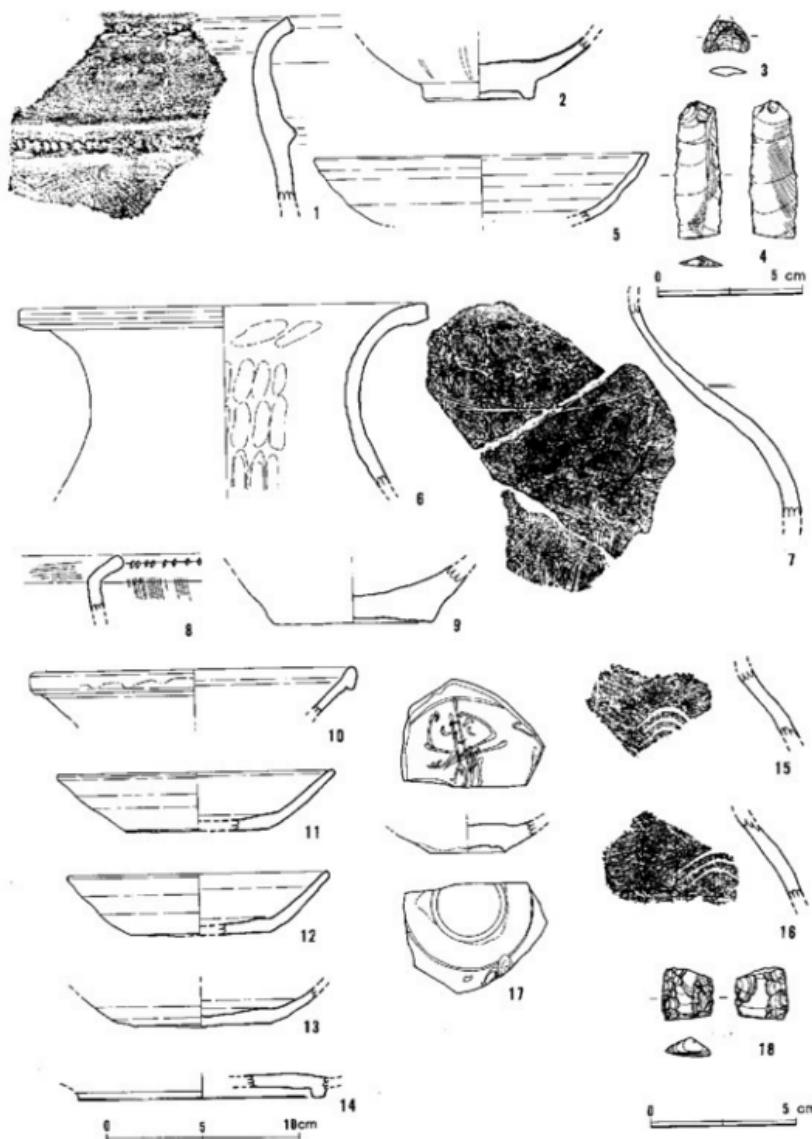


Fig.8 出土遺物実測図 (I) (1/2・1/3)

1~4: SD101 5: SD102 6~9: SD103 10~14: I雨水加上帶砂 15, 16: SD201 17: SD205 18: A-1区中世水田耕作土

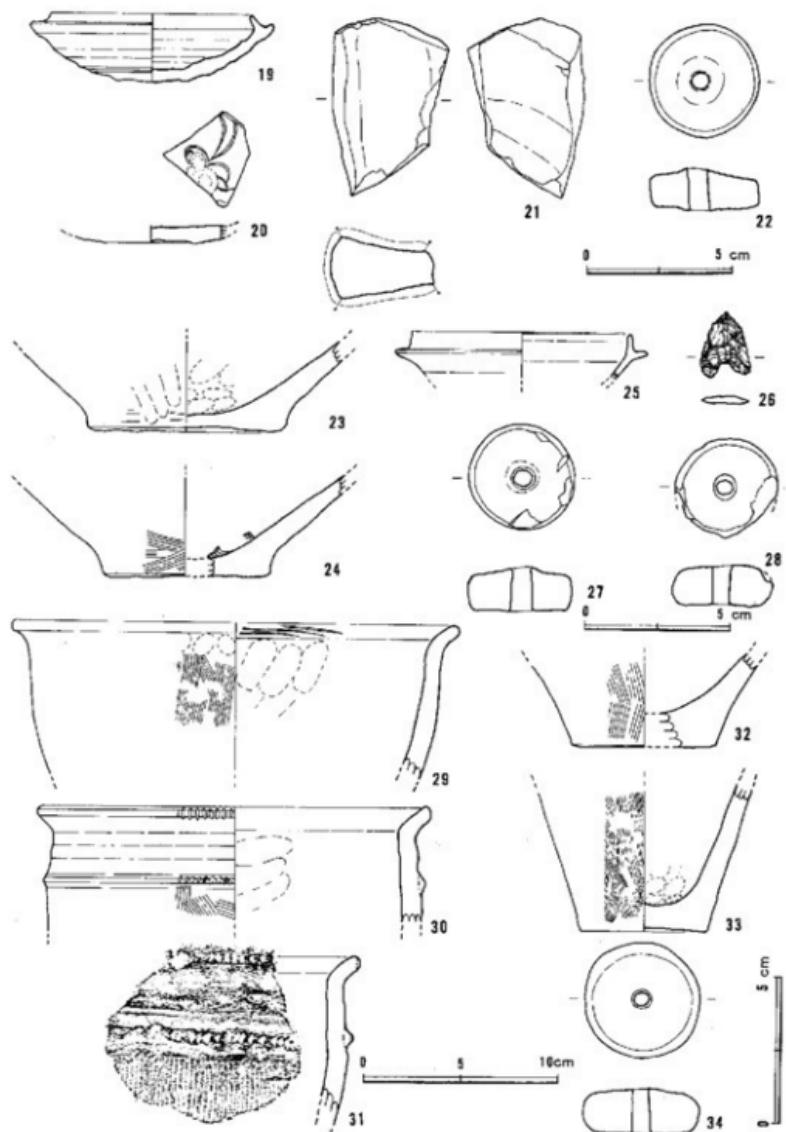


Fig.9 出土遺物実測図(2) (1/2-1/3)

19~22: A-1区II層上層 23, 24: Aトレンチ中央 25: Aトレンチ東下層 26~28: Aトレンチ東上層 29~31, 34: Bトレンチ上層 32, 33: Bトレンチ下層

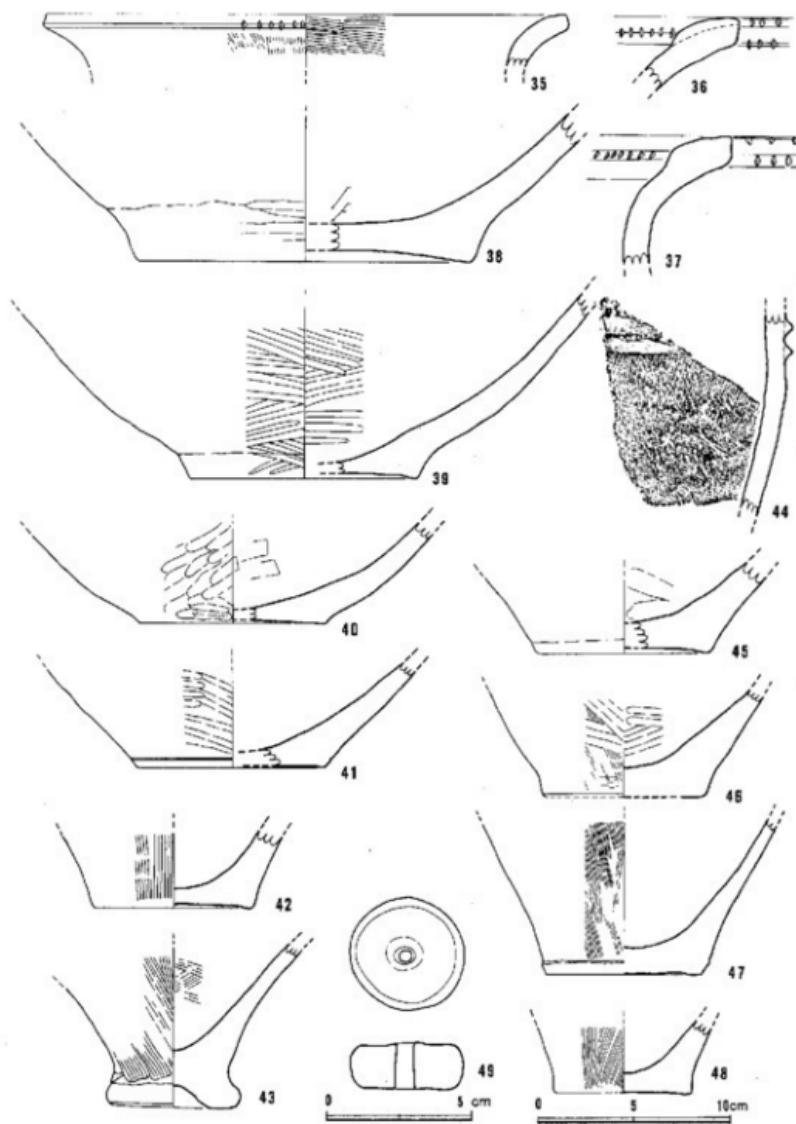


Fig.10 出土遺物実測図 (3) (1/2-1/3)
35-38: A-2区 中耕水田耕作土 39-48: A-2区 II面土層

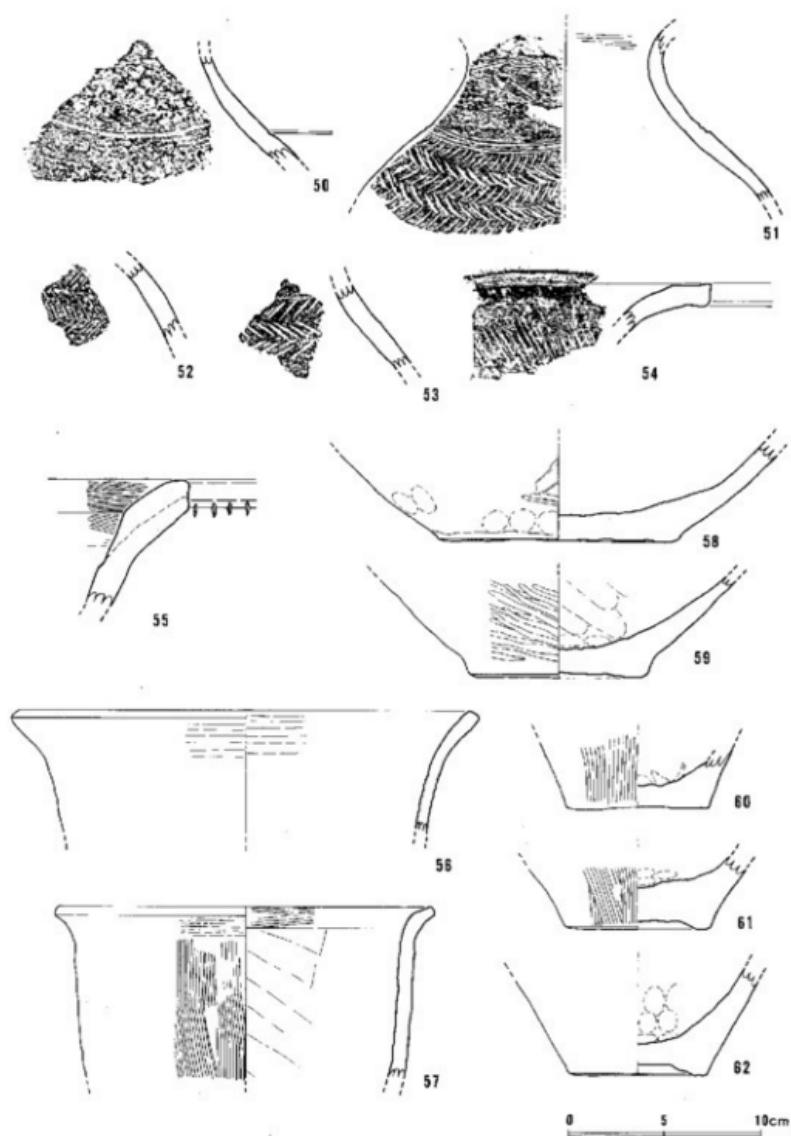


Fig.11 出土遺物実測図(4)(1/3)
50, 51, 61, 62: A-2区 上層 52~60: A-2区 下層

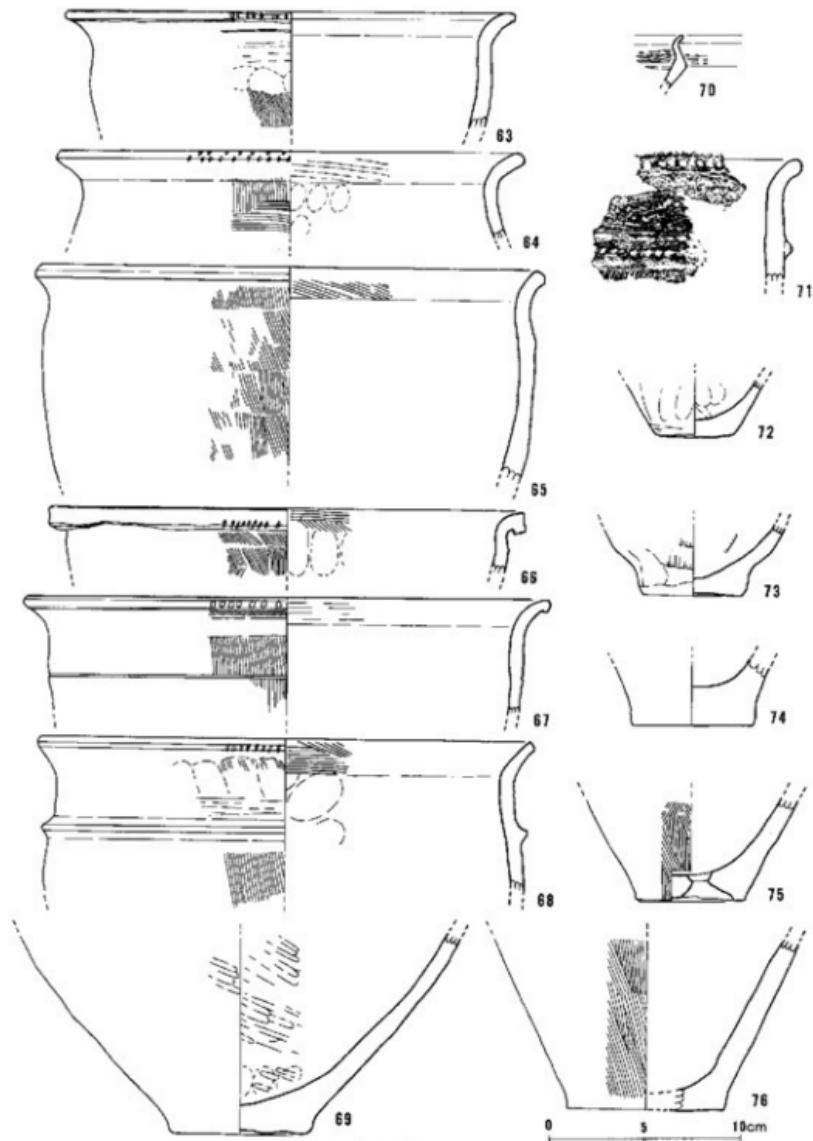


Fig.12 出土遺物実測図(5)(1/3)
63~68, 72, 73, 76: A-2区 下層 69~71, 74, 75: 既生水田面

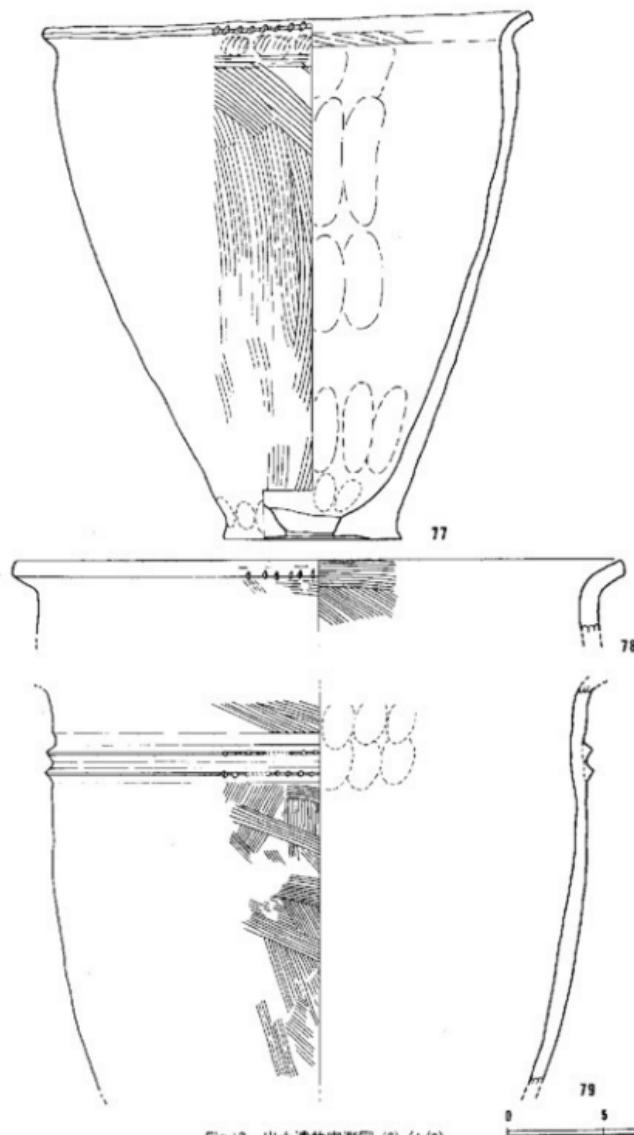


Fig.13 出土遺物実測図 (6) (1/3)

77: A-2区 陶生水田面 78, 79: A-2区 下層

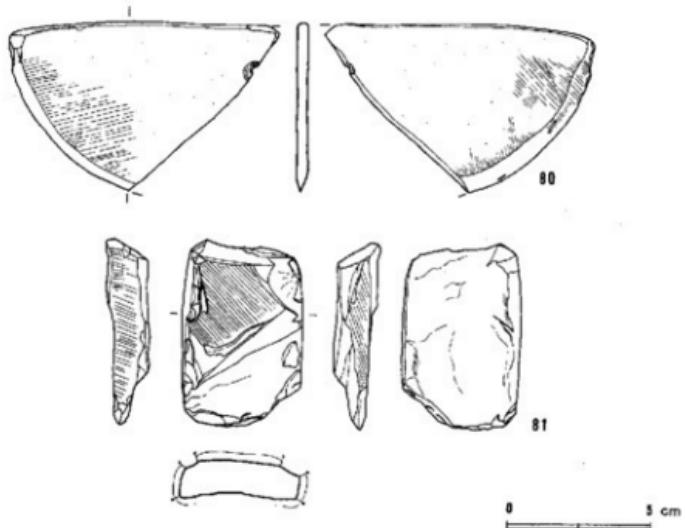


Fig.14 出土遺物実測図 (7) (1/2)

80, 81 : A - 2区 弥生水田面

Fig.13-77はほぼ完形に復元できる壺形土器である。弥生水田直上から出土したもので、口径25.1cm、底径9.0cm、器高27.1cmを測る。口縁は外反し下端に刻目を施す。外面はハケ目調整、内面は口縁部がハケ目、胴部がナデ調整である。底部に焼成後の穿孔が認められる。暗灰茶褐色から黒灰色を呈し、胎土に1~2mm大の石英・長石砂、それに細かな雲母を含む。78は堀口縁で、口唇下端に刻目を施し、内外面にハケ目調整が認められる。79は胴部上位に刻目三角突帯を2条貼付する壺形土器で、突帯径27.4cmを測る。外面は灰黒褐色を呈し、細かなハケ目調整が施される。胎土には1~2mm大の石英・長石砂が混入する。

Fig.14-80・81は弥生水田足跡から出土した石包丁と砥石である。80は、現存長9.3cm、現存幅5.8cm、最大厚0.4cmで、断面が薄い割には大形の石包丁である。両面には筋理状の剝離面が残り、粗い研磨によって整形されている。刃部近くに研磨痕が残る。刃部は両面から研ぎ出されているが、片方の角度が急である。孔は上方に1孔だけ確認できる。やや茶色っぽい灰色を呈し、石材は安山岩質凝灰岩ホルンフェルスであろう。81は、最終的には砥石として使用されているが、片刃石斧の破損したものを転用したのではなかろうか。現存長6.3cm、最大幅4.0cm、最大厚1.4cmを測る。細かな擦痕が4面に認められる。しかし、裏面は全面剝離面になっており一部擦り磨いているに過ぎない。石材はキメの細かい頁岩で、明るい灰白色を呈している。

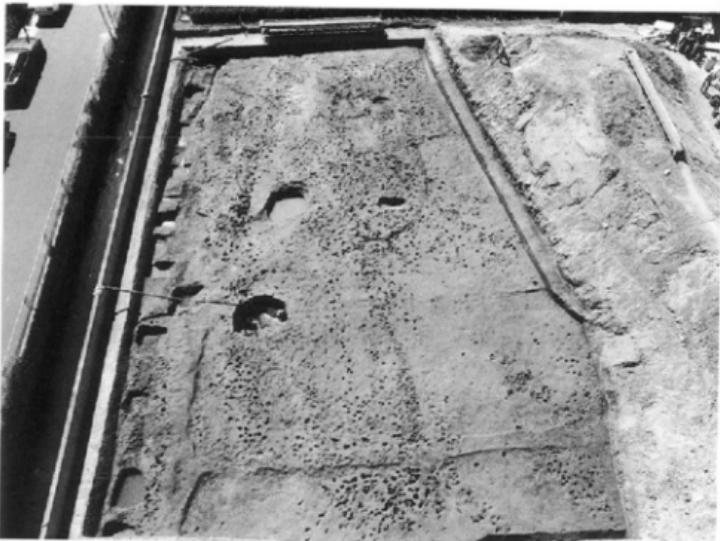
IV おわりに

今回の調査は、面積からすると444m²という狭いものではあったが、警弥郷B遺跡の内容の一端が明らかになった。

先ず、第Ⅰ面の調査では、畦畔を伴う水田址が確認できた。水田上面には粗砂層が広がり、畦畔や水田面に残る足跡の確認は容易であった。しかし、畦畔自体は全面に残っていた訳ではなく、単位面積を割り出すことができなかった。でも、水田面東側には用水路と考えられる水路が併設し、ある程度の水田構造を窺い知ることができた。水田面はさらに東側の未調査区へ広がっているものとみられる。第Ⅰ面の出土遺物は主に水田面を覆う砂層と東側の水路からであった。遺物は古墳時代から15世紀代までの幅があり、殆どが流れ込みで、時期の決定が困難であった。しかし、近世の遺物は全く認めることができず、これよりも新しくなるとは考えられなかつた。A-1区の水田土壤を掘り下げたところ、直下のS D205で中国明代の青花皿が出土した。基筒底で見込みと外面に染付の文様があり、16世紀前半代に属するものであろうと考えられた。これより新しい遺物は検出できなかつたので、この上にのる水田址の時期も16世紀前半代を遡るものではないと判断できる。したがつて、第Ⅰ面の水田址は16世紀前半代から中期の時期であることを想定しておきたい。

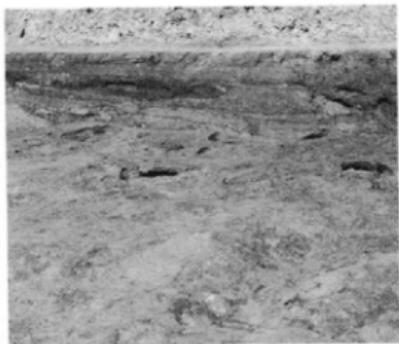
次に、第Ⅱ面の調査では、弥生時代の遺物がまとまって出土し、弥生時代の遺構の広がりを確認することができた。弥生時代の遺物は1972年の新幹線関係埋蔵文化財調査の弥永遺跡B地点でまとまって出土している。今回の調査地点から北側に450mしか離れておらず、一連のものと考えられる。弥永遺跡B地点では、板付II式、城ノ越、須玖式土器が確認され、板付II式土器は単純に出土している。今回の調査では、弥生土器包含層が砂層であるため、ある程度の遺物の混入を考えざるを得ないが、時期的には板付II式から城ノ越の時期に相当すると考えられる。相対的には上層の遺物が新しく、下層の遺物が古いものであった。下層で確認した水田址は残りの良いものではなかつたが、黒色粘質土が広がり、砂の詰まった足跡状の落ち込みが確認されたので、一応、水田址として認識しておきたい。時期は前期末に相当すると考えられる。

今回調査した警弥郷B遺跡の周辺には、縄文時代から弥生時代にかけての遺跡が広く分布する地域である。那珂川右岸の段丘上には特に多くの遺跡があり、北方の臼佐遺跡では縄文後晩期と弥生前期（板付I式）の遺物が調査されている。弥永遺跡A地点からも弥生前期から中期初頭にかけての遺物が出土している。B地点は先述したが、今回調査した部分までの広がりが確認できる。那珂川町域では縄文後期から弥生期にかけての遺跡が広がり、松木遺跡では弥生前期末から中期にかけての甕棺墓地が調査されている。今後、那珂川流域の調査が進展すれば、集落や墓地、生産遺跡の様子が明らかになるものと期待される。

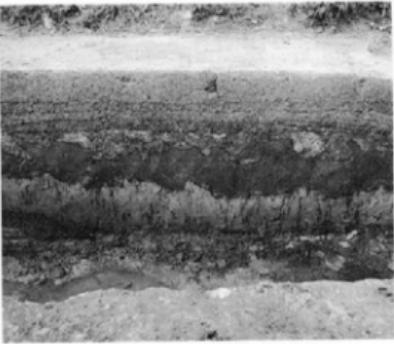


▲ (1) 第Ⅰ面水田址出土状況（北から） ▼(2) 第Ⅱ面水田址出土状況（西から）





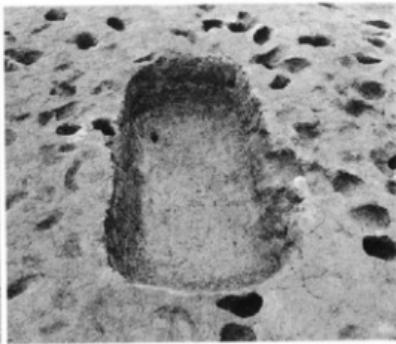
(1) 調査区北壁土層堆積状況（南から）



(2) 調査区南壁土層堆積状況（北から）



(3) SK103 出土状況（南から）



(4) SK105 出土状況（西から）



(5) 水田①、②出土状況（西から）



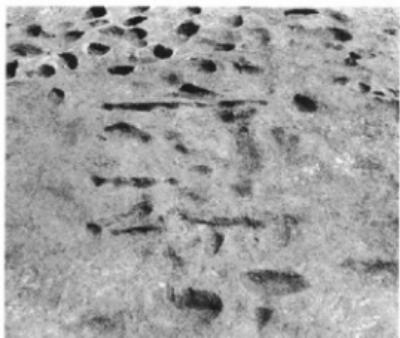
(6) 水田③、④出土状況（北から）



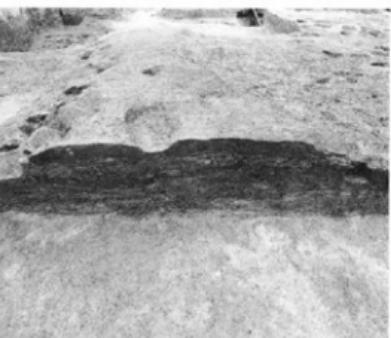
(1) 東西畦畔水口出土状況（北から）



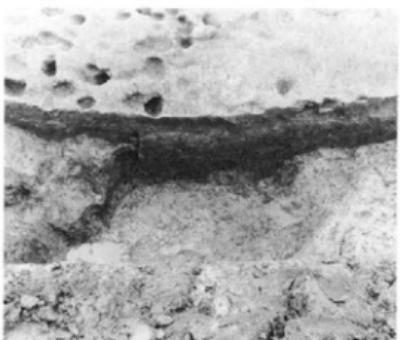
(2) 偶蹄目足跡出土状況（東から）



(3) 条溝出土状況（西から）



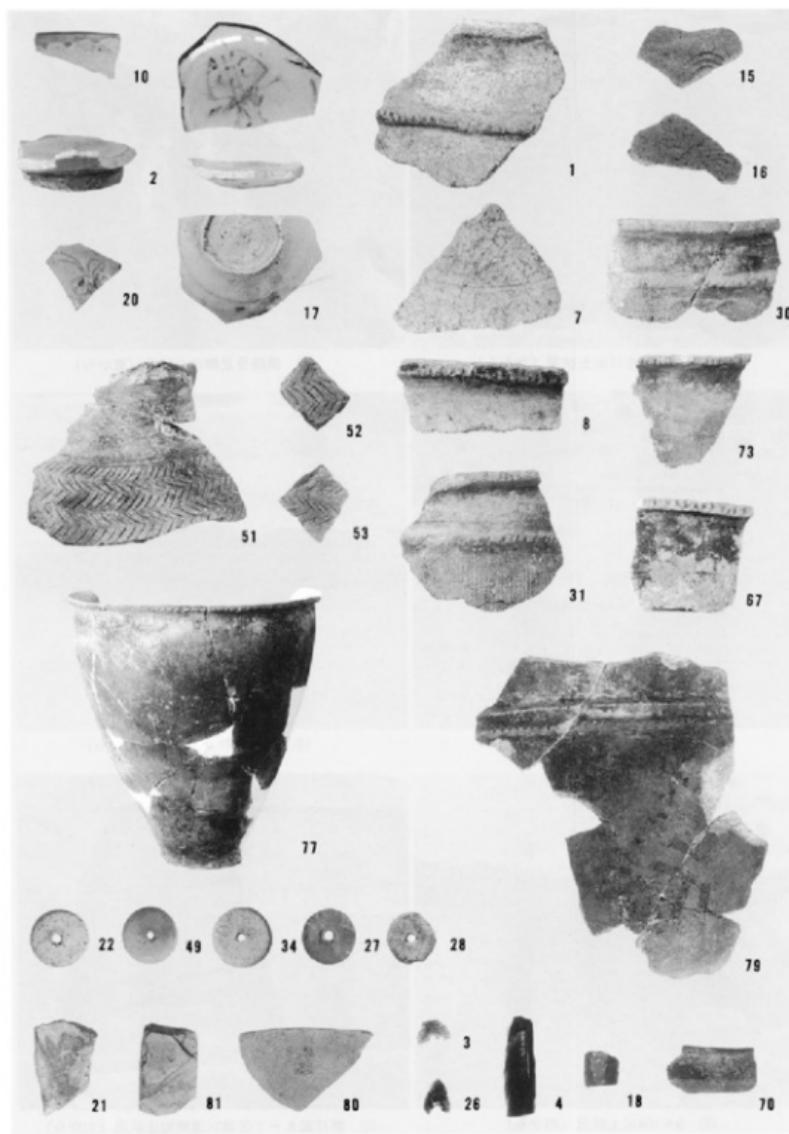
(4) 南北畦畔切断状況（北から）



(5) S×104出土状況（西から）



(6) 第II面A-I区溝状遺構出土状況（北から）



出土遺物（番号は実測図と一致する）

警弥郷B遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第278集

平成4（1992）年3月13日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1
(092)711-4667

印刷 栄光印刷株式会社
福岡市東区松田一丁目9-30
(092)611-3838

